ペルシーレスとシヒスムンダの苦難

M・デ・セルバンテス——下

Los trabajos de Persiles y Sigismunda: Miguel de Cervantes Saavedra

紀田順一郎　荒俣宏
責任編集

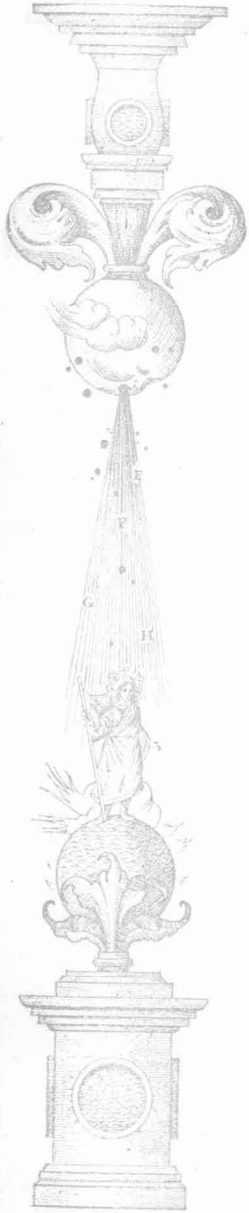
世界幻想文学大系 16 B

世界幻想文学大系　責任編集―紀田順一郎＋荒俣宏
第十六巻B

ペルシーレスとシヒスムンダの苦難――下

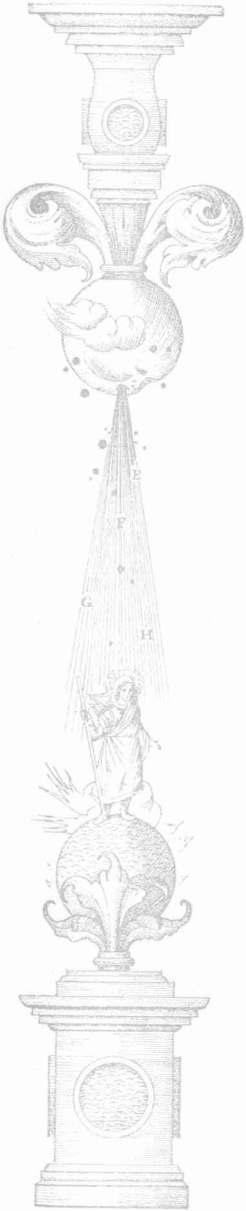
昭和五五年八月二〇日印刷　昭和五五年八月二十五日初版第一刷発行
著者――ミゲル・デ・セルバンテス
訳者――荻内勝之
発行者――佐藤今朝夫　発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本――杉浦康平＋鈴木一誌　本文挿画――渡辺冨士雄
印刷――セイユウ写真印刷株式会社　製本――大口製本印刷株式会社
定価――二、八〇〇円
●―落丁本・乱丁本はおとりかえします

荻内勝之おぎうちかつゆき
一九四三年、哈爾浜市生れ。
神戸市外国語大学外国語学部
卒業後、同大学院修士課程修了。
現在、東京経済大学専任講師。
専攻、スペイン文学。
主要訳書――
ウナムーノ『人格の不滅性』
（共訳）法政大学出版局、
一九七三年。
『ロルカ全集』第三巻（共訳）、
牧神社、一九七五年。



世界幻想文学大系——第十六巻B

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



ペルシーレスとシヒスムンダの苦難——下

M・デ・セルバンテス——荻内勝之＝訳

目次

11 ペルシーレスとシヒスムンダの苦難——下　M・デ・セルバンテス

第一巻、第二巻は上巻

13 第三巻

14 第一章

26 第二章—巡礼の一行。イスパニアの旅。一行の上に珍事奇事がもちあがる

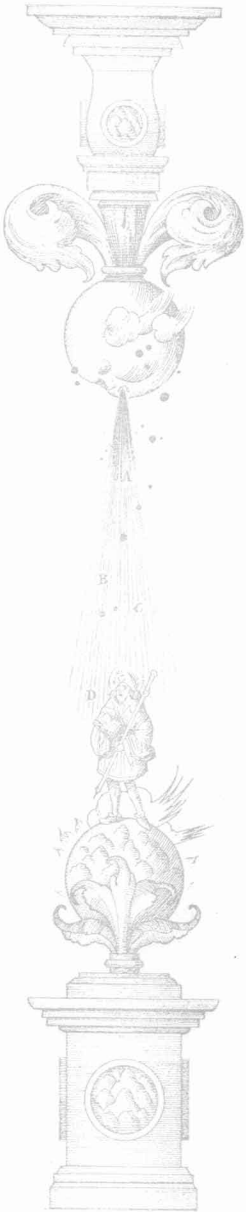
38——第三章—木に隠った娘。その身の上
46——第四章
62——第五章
78——第六章
94——第七章
102——第八章
112——第九章
128——第十章
140——第十一章
154——第十二章
166——第十三章

174 第十四章
184 第十五章
192 第十六章
202 第十七章
212 第十八章
220 第十九章
228 第二十章
238 第二十一章
247 **第四卷**
248 第一章

258 ―― 第二章
266 ―― 第三章
276 ―― 第四章
282 ―― 第五章
290 ―― 第六章
300 ―― 第七章
310 ―― 第八章
318 ―― 第九章
324 ―― 第十章
330 ―― 第十一章
336 ―― 第十二章―ペリアンドロとアウリステラの素姓が知れる

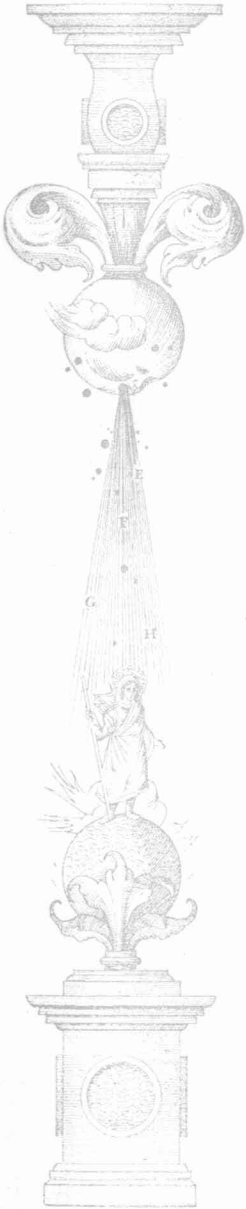
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

344 ―― 第十三章
352 ―― 第十四章
357 ―― セルバンテスと『ペルシーレス』――荻内勝之

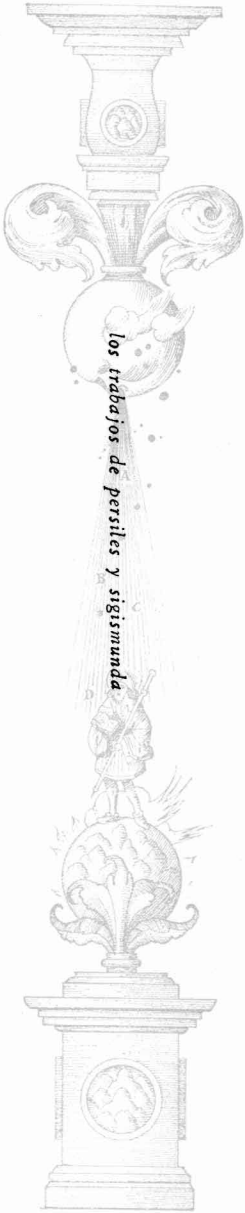

A
B
C
D

ペルシーレスとシヒスムンダの苦難

北辺物語——下



第三巻（ベルシーレスとシヒスムンダの苦難、北辺物語、その第三巻）



われわれの魂というのは転々とたえまなく移ろうもので、それが留まり安らぐところとなると、それをつかさどる中枢、すなわち神の御許しかないようだ。そもそも魂は神に召されるべく創造られているから、その御許こそが安らぎの場なのである*1。魂からしてこうであるから思念が移ろいやすいことはおどろくまでもなくて、あれは駄目これがいい、あれは捨てようこれはこのままという具合に移ろうわけであるが、最善の思念はどれかというと、悟性の狂いがからんでいないかぎり、安らぎにもっとも近い思念を最善とみなせよう。

右はアルナルド王子がアウリステラにかしずかんとする宿望を須臾にして放棄した、あの軽薄さを弁解する意味で言及されたものである。しかし王子にはかならずしも放棄したとはいいきれないところがあるから、留保したというのが正しかろう。一身の面目を立てようと願う気持は人間が何をさておいても満たそうとする欲求であるが、王子の魂にもこの欲求がとりついていたのである。王子は隠者の島を去るにあたってある晩、ペリアンドロとふたりきりの場でこの気持をつたえ、妹アウリステラ殿にまちがいのない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.